漢字はむずかしくて覚えられないのではない

戦後、漢字の力が弱くなったということがよくいわれます。と同時に、漢字がむずかしいということもよくいわれます。しかし、わたしは、これはあたりまえのことだと思っています。なぜかといいますと、戦後、漢字を軽んずる傾向が生まれ、「漢字なんか、覚えなくてもいいんだ」というような考えが、まず一部の教師の間に起こり、それが生徒にえいきょうして、漢字を勉強する場に、漢字なんてどうでもよいというようなふんいきがただよっているからです。

漢字を学ぶものが、「漢字なんてどうでもよい」「漢字を知らなくたって、たいしたことはない」というような考えでいたのでは、記憶体制が成立しません。こんな状態で学習したのでは、漢字がどんなにやさしくても、記憶できるはずがありません。記憶貯蔵庫に収められないで、排出（忘却）されてしまうのです。そして、記憶できない漢字は、むずかしいことになるのです。